徳島大学 Tokushima University Faculty of Medicine

医学部だより

第41号 2020.10.1

徳島大学医学部の近況

医学部長　赤　池　雅　史

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が短期間で全世界に拡大するなか、徳島大学医学部においても、３月には学外実習や徳島大学病院での実習が一時中止となり、卒業式、謝恩会、そして入学式も次々と中止となりました。さらに、新学期の開始は４月15日へ延期するとともに、急きょ遠隔授業（eラーニング）で実施することになりました。

ICT を活用した教育の推進は、以前からその重要性が指摘されており、徳島大学では2019年度入学生からノートパソコン必携制度（Bring Your Own Device; BYOD）の開始とともに、eラーニング学習管理システム（Learning Management System; LMS）、オンライン会議・授業システム、オンラインストレージの導入や学内無線 LAN 環境の整備を進めてきました。蔵本地区におけるｅラーニングは、医療系５教育部共通科目や中国・四国がんプロ養成プログラム等の大学院教育科目で限定的に実施していましたが、今回、学部教育全体にｅラーニングを導入するにあたっては、情報センターや高等教育研究センター学修支援部門 EdTech 推進班の支援を得ながら、２週間足らずの準備期間で体制を構築し、大きなトラブルなく開始することができました。特筆すべきことは、このような困難な状況に直面した際に、教員ならびに学生の有志が協力を申し出てくれたことで、その働きにより、実施にあたっての多くの問題を短期間で解決することができました。ご協力いただいた皆さんに心から感謝を申し上げるとともに、上意下達ではなく、共に創り上げていくという教育の本質をあらためて実感した次第です。

学生を対象としたアンケートでは、コンテンツを繰り返し視聴することで理解が深まる、今後も継続して欲しい等、ｅラーニングに肯定的な意見が多数を占めていました。ｅラーニングでは、教員が授業デザインを十分組み立てておく必要があり、授業の質が向上したとも考えられます。その一方で、従来の授業が、双方向性および即時性等の対面で行うメリットを最大限活用できていなかった可能性もあります。最近ではオンライン会議・授業システムを活用して、PBL チュートリアルや教育カンファレンス等、双方向性のグループワークを遠隔で行う試みも始まっています。今回のｅラーニング導入を一時的対応に留めるのではなく、対面・遠隔それぞれの特性を明確化し、両者をハイブリッドした新しい教育スタイルへ昇華させていくことが今後の課題と考えられます。一方、COVID-19を契機に、安定的な通信状況の確保に課題を残すものの、学内外の各種会議も遠隔で実施できる体制を整えることができました。対面でなければ十分に議論できないものもありますが、遠隔会議には移動時間が不要、学内外から多彩な人材に参画していただけるというメリットがあります。組織管理・運営においても、対面と遠隔の両者をどのように両立させていくかが、組織活性化のキーであると思います。

将棋の藤井聡太棋聖は、17歳11カ月での最年少タイトル獲得にあたり、新型コロナウイルス感染症の影響で、４月中旬から約１カ月半にわたり公式戦がなかったことについて、「じっくりと自分の将棋と向き合えた。序盤の定跡を自分なりに整理した」と述べています（令和２年７月22日朝日新聞記事より）。この藤井聡太棋聖の言葉こそが、我々にとって最も本質的かつ重要なことではないでしょうか。今回、COVID-19への対応を、一時的な「コロナ禍」で終わらせるのではなく、自分自身、教育ならびに組織運営のあり方を振り返る貴重な契機ととらえ、新しい時代を切り開く原動力へ転換していかなければなりません。

目次 CONTENTS

巻頭言…… 1
海外留学体験記…… 2
学生委員会から…… 3
教務委員会から…… 3
新型コロナウイルス感染症と公衆衛生対策について… 4
看護リカレント教育センター
学生のうちから知ってほしい「リカレント教育」…… 5
徳島医学会報告…… 6
各賞受賞者…… 6
学遊抄…… 7
新設寄附講座紹介…… 8
数字で見る医学部…… 9
令和２年度臨床実習後OSCE成績優秀者 ……10
医学部長特別表彰……10
新任教職員ご挨拶……10
新任准教授紹介……12
医学部行事予定……12
編集後記……12

海外留学体験記

テキサス大学 短期留学プログラム 報告

（留学期間：令和元年6月17日～令和元年8月9日）

医学科５年　堀　口　　航

2019年６月17日から８月９日までの８週間、アメリカのテキサス州ヒューストンにて短期研究留学をさせていただきました。私はMcGovern Medical School at UTHealthのInternal medicine of Cardiologyの研究室に所属しました。そこでは主にモデルマウスを用いた動脈硬化の研究に従事させていただきました。また、隣接するMemorial Hermann HospitalのCardiovascular medicineで見学もさせていただき、アメリカの高度な医療を体感することができました。今回の留学では、アメリカ人医学生だけでなく、現地の日本人医師・研究者の方々など本当に多くの出会いがあり、良い刺激になりました。この感覚を忘れず、世界に通用する医師になるべく精進し続けようと思います。最後に今回の留学をご支援いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

南イリノイ大学 短期留学プログラム 報告

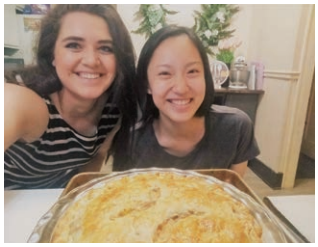
（留学期間：令和元年8月22日～令和元年9月22日）

医学科３年　滝　本　子　々

八月下旬から一か月間、アメリカの南イリノイ大学に語学留学に行きました。そこで私が体験したことをご紹介します。初めの一週間は現地の人の英語についていけず悔しい思いをしましたが、大学の授業や寮での生活をこなすうちに自分の言いたいことが自然と口をついて出てくるようになりました。また、たくさんの素敵な人々との出会いもありました。教会のバレーボール大会で知り合った女性とは一緒に買い物や料理をしたり、ホームパーティーに呼んでもらったりしました。授業や寮で出会った学生はインドや台湾、サウジアラビアなど世界各国から集まっており、放課後や休日には互いの専攻の話をしたり、UNOやビリヤードをしたりと楽しい時間を過ごしました。互いの近況を報告し、また英語を忘れないためにも彼らとは今でも連絡を取り合っています。振り返ると一カ月の留学生活はあっという間でしたが、その間にここでは語り尽くせないほど様々な経験をしました。単なる語学力の向上だけではなく、日本以外の国の文化を学ぶという点でもすばらしい経験でした。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった皆様に感謝いたします。

授業最終日に開いてもらったサプライズパーティー



二人で作ったチキンポットパイ

International Language Schools of Canada 短期留学プログラム 報告

（留学期間：令和元年9月7日～令和元年9月29日）

医学科２年　中　井　洸　我

～留学から約１年が経過して今思うこと～

今はコロナによる影響で、オフラインでの授業もなく自宅でただ基礎医学の勉強をしている最中ですが、気分転換に少し１年前に行ったカナダでの留学体験記を書かせていただきます。

私がカナダに行ってから１年が経とうとしていますが、振り返って今思うことは「留学はゴールでもありさらなるスタートにもなる」ということです。すなわち、留学をきっかけに新たな目標を設定することができるということです。実際私の場合、留学は英語を勉強してから行こうと留学をゴールとして据えてしまっており、中々海外に行けずにいました。留学に行って語学の上達を感じたらこれで終わりとさえ思っていました。しかし実際は、留学をきっかけに世界で闘える医師になりたいという新たな目標ができました。その新たな目標ができてからはそれまで以上に、より一層英会話に力を入れるようになりました。

このように留学は自分が思っている以上のものを与えてくれることがあります。次の留学では、どのような形で世界と闘えるようになりたいのか自分の武器は何かを探すことを目的に海外に行き、帰ってからは自分の武器を磨くことに努めようと思っています。

語学学校のダンスクラブの皆との集合写真

学生委員会から

医学部学生委員長
（顕微解剖学分野 教授） 鶴 尾 吉 宏

医学部学生委員会は、10名の教授および准教授の委員から構成されており、医学科の基礎系から３名（鶴尾吉宏、冨田江一、有澤孝吉）、臨床系から２名（廣瀬隼、秦広樹）、医科栄養学科から２名（濱田庸弘、酒井徹）、保健学科から３名（森田明典、岸田佐智、富永辰也）の委員が担当しています。本年度の委員長は鶴尾吉宏が、副委員長は森田明典先生が務めています。この組織は、医学部と大学院における学生生活に関わる諸事項を審議して学生生活の支援を行っています。学生の修学指導はもちろん、学内外での課外活動の監督、奨学金貸与の選考や、表彰や懲戒に関することの他にも、身分異動、福利厚生、健康・保険や安全に関すること、進路、就職や留学、国際交流に関することなど学生生活に関係する多数の内容を扱っています。

この委員会の役割は、医学部の学生が上記の諸項目において安全で快適な学生生活を送ることができるように支援することです。学生生活において休学願や復学願の提出を必要とする場合にも、その都度相談等に当たっています。但し、学生の非違行為が認められた場合には、学生委員会が事情聴取などを行い、学長に報告し全学の学生委員会で処分の量定をして懲戒などの厳しい判断が必要となる事例もあります。また、学生証を紛失して再発行の依頼を受けることが時にありますが、学生証は身分証明書であると同時に、学内のセキュリティ情報が入力されていることから、医学科の５年次からの臨床実習での病棟への出入りの際などには必須となります。紛失した後に速やかに届けない場合には、再発行できない事態も生じますので、学生証の管理には十分な注意を払うようにお願いします。

本年度は当初から新型コロナウイルス感染の拡大防止のため、本学においても授業開始の延期ならびに授業の再開後も遠隔授業による講義・実習の実施などによって、学生の皆様には大変な負担を背負いながら学生生活を過ごさなければならない状況が続いております。また、生活面では、新型コロナウイルスの感染予防のために、３つの密（密閉、密集、密接）の回避、ならびに緊急事態宣言の対象地域への移動の制限、会合などへの参加の自粛、課外活動の当面の禁止、各自の感染対策（マスク着用、手洗い、うがいの励行）の徹底などを通じて、本学学生としての責任を自覚して節度ある行動をとっていただいております。今後も新型コロナウイルス感染の再燃が懸念されますので、学生の皆様には引き続いて感染予防のための適切な行動をとっていただくようにお願いいたします。また、学生の皆様には、大学内はもとより学外においても、医療関係者として将来社会で仕事をする使命を受けていることを常に自覚し、正しい倫理観と道徳心を持って行動するように心がけてください。

学生生活は自主・自立が基本であり、学生には自己責任が問われます。しかし、学生生活で困ったことが生じた場合には、医学部学生委員会の先生方ならびに学務課の学生係の担当者が相談に応じています。良い解決策が見つかるように協力いたしますので、気軽に連絡して相談に来てください。

教務委員会から

医学部教務委員長
（疾患病理学分野 教授） 常 山 幸 一

医学部教務委員会は医学科、医科栄養学科、保健学科から選出された19名の委員で構成されており、医学部の教育課程の編成や授業科目の履修方法、進級及び卒業の認定、留学や他大学等との授業科目の履修、授業概要の作成等、学生の学習に関する事項の助言指導を行っています。

毎月の教務委員会で協議される内容は、時間割や履修に係る変更や非常勤講師の選出、試験の実施や評価・判定といった「現在」の教育に係るものが中心ですが、「これから」の教育体制の構築も重要です。現在、医学部では学生委員が加わったプログラム評価委員会、及びカリキュラム委員会が稼働しており、学生の意見を教育に取り入れる仕組みが作られています。医学部のカリキュラムはプログラム評価委員会で検討され、問題点や改善点が洗い出されます。その提言はカリキュラム委員会で審議され、提案された新たなカリキュラムを教務委員会が主体となって実行していきます。医学部教務委員会には卒後臨床研修センター、医療教育開発センター、医学部教育支援センター、医学部学務課の構成委員が参画しており、これらの機関と協同して、学生の意見を取り入れたより良い教育の推進を目指しております。現在は、教養教育、基礎医学、行動医学、社会医学など、関連する学問領域の水平統合化や基礎医学から臨床医学へ繋がる垂直統合、臨床実習期間の拡充、卒業試験の統合化等が喫緊の課題として議論されています。

このような教務委員会の「ルーチン」に、今年度は「遠隔授業への対応」という新たな業務が加わりました。また、学業等に不安がある学生の面談を行い、問題を小さな芽のうちに摘み取るのも教務委員の重要な仕事です。昨年度まで長く教務委員長をお務めになった西村教授からは、「年間100人の面談を行った」と聞かされておりましたが、今年度も順調に？面談件数が伸びてきており、学生がコロナ禍の中で様々な問題に直面している現状も見えてきています。遠隔授業の推進は学生にとっても、教員にとっても「繰り返し勉強ができる」「時間に縛られない」というメリットを生みだしましたが、人との繋がり、という重要な要素が不足してしまっています。今後も遠隔授業は様々な形で医学教育に取り入れられていくことは疑いありませんが、遠隔授業を活かしながら足りないところを如何に補っていくか、教務委員会で「新しい教育様式」の在り方を見極めて行くことが重要と考えています。

新型コロナウイルス感染症と公衆衛生対策について

大学院医歯薬学研究部公衆衛生学分野　教授　森　岡　久　尚

昨年、中国の武漢で集団感染が報告された新型コロナウイルス（COVID-19）は、瞬く間に世界中に拡大し、今年３月11日に世界保健機関（WHO）はパンデミック（世界的大流行）に相当すると発表した。その後も、さらに感染拡大を続け、感染が確認された者は1100万人を超え、現在もなお、アメリカ大陸、アジア大陸の南東部、アフリカ大陸を中心に拡大を続けている。（2020年７月６日時点）

日本も例外ではなく、３月下旬から新規感染者が急増し、４月中旬にピークとなり、その後、徐々に減少し５月中旬頃には新規感染者が１日当たり50人を割り込み、いったん感染症は落ち着いたように見える。（図１）この間、COVID-19に対するワクチンや特効薬がない中、住民の行動変容、感染者の入院（いわゆる隔離）、疫学調査による濃厚接触者の特定など公衆衛生対策の徹底で対応することになった。（図２）これらの公衆衛生対策とウイルスの封じ込めとの因果関係は検証を待つ必要があるが、注目を集めることになったCOVID-19の公衆衛生対策について振り返ってみたい。

日本では、２月までは1日当たりのCOVID-19の新規感染者数が30人を下回っていたが、３月中旬になって新規感染者が増加し、１日当たり50人を超えるまでになり、明らかに感染が急速に拡大していくことが予測された。そこで、手洗い、咳エチケット、マスクの着用に加えて、密閉、密室、密接のクラスター（集団）発生のリスクが高いと考えられる三つの条件を避けるという基本的な感染症防止対策が呼びかけられた。また、クラスター対策として、感染者の積極的疫学調査により濃厚接触者を特定し、そこからさらなるクラスターの発生を避けるクラスター対策を保健所が中心となって行うこととなった。これまでのインフルエンザや結核、麻疹などの対応の経験から、これらの対策が行われたが残念ながら新規感染者の増加は止まらなかった。

図１：COVID-19 新規感染者数（日本）

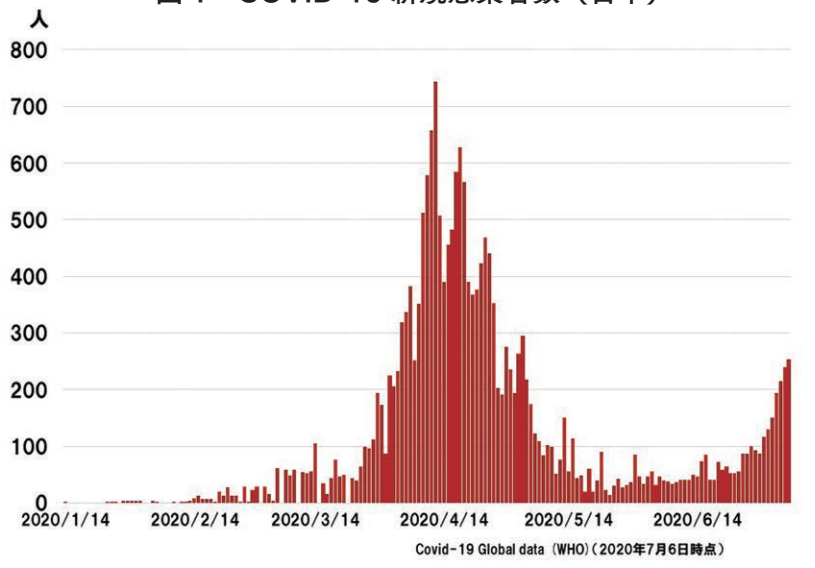
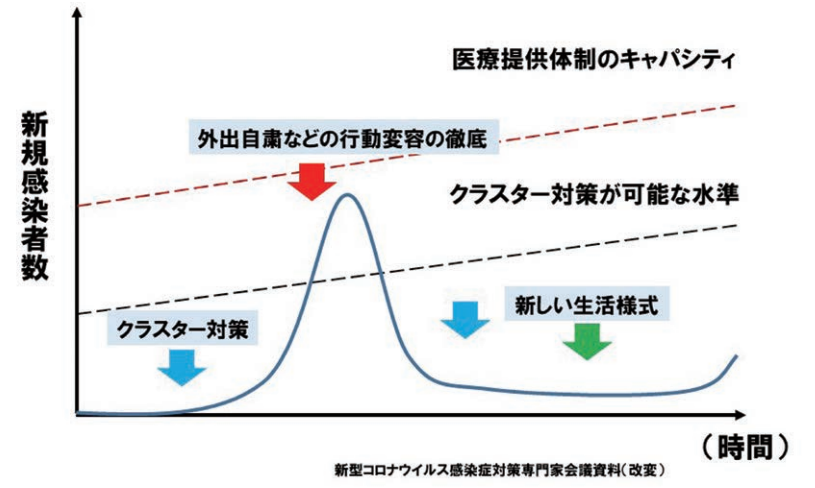


図２：新規感染者数の推移と対応（イメージ）



３月下旬には1日当たりの新規感染者数は連続して100人を超え、クラスターが多数発生し、保健所の疫学調査の要員の不足などによりクラスター対策が十分に行えなくなった。感染者の治療を行う病床も重症者で埋まり、この感染症対策で最も重視する死亡率を下げるための最後の砦である病床が不足し、医療崩壊が目前に迫った。この危機感から、政府は外出自粛など、人との接触を８割削減するという厳しい行動変容を国民に求めることとなった。その求めに応じて、国民は不要不急の外出を自粛するなど、これまでの公衆衛生対策では経験したことがないぐらいの行動変容が見られた一方で、繁華街の通行人や営業を自粛していない店舗に批判が集まるなどの負の側面も表れるようになった。

幸いにも前述のとおり、４月中旬をピークに１日当たりの新規感染者数は減少傾向となり、病床の不足は徐々に解消された。医療崩壊の危機の再来を避けるため、病床のさらなる確保、保健所の疫学調査要員の確保やIT化などに加え、基本的な感染症対策を生活場面別に詳細にした新しい生活様式が提唱されている。しかしながら、ワクチンや特効薬はなく、この春に経験した危機の直前と大きく状況は変わっていないように思う。公衆衛生の取組に関しては、安全で健康的な生活習慣を目指すための指導や教育による行動変容には限界があり、すでにスマートフォンのアプリケーションを活用したウォーキングや禁煙の支援、事故を起こしにくい環境（WHOセーフコミュニティ）や製品の開発が進められている。人々の行動変容に期待する以外に、テレワーク、リモートワークやオンライン会議の導入推進、デジタル化、自動化された製品や技術の開発など、感染拡大が起きにくい非接触型の社会生活、日常生活への移行も進めていく必要があると感じている。

看護リカレント教育センター
学生のうちから知ってほしい「リカレント教育」

大学院医歯薬学研究部看護リカレント教育センター　特任教授　山　下　留理子

1）学びの終着点

専門職業人をめざす学生の皆さんは、学びのゴールが「大学卒業」や「国家資格取得」までではなく、生涯学び続けることであると認識している人が多いと思います。AI や IoT など急速な技術革新や科学が進歩しても、未だ予測困難なことが起こり、科学的根拠をもってそれに対処し改善・予防していくことが求められます。今まさに、私たちは新型コロナウィルス禍の渦中にいながら、痛感していることではないでしょうか。感染症に限らず、保健・医療・福祉分野をめぐる環境が大きく変化する中で、専門職業人として知識や技術の絶えざるアップデートが必要な時代であること、新たな課題・複雑困難な問題解決に向け対応していく力を、生涯にわたって継続的に養っていくことが求められています。

2）リカレント教育とは

本センターの名称でもあるリカレント (recurrent) とは、「反復、循環、回帰」を意味します。リカレント教育は大学等の学問を修めて仕事についてからも必要と感じたタイミングで学びなおすことであり、「学びなおし教育」「回帰教育」「循環教育」ともいわれます。リカレント教育のうち、リフレッシュ教育は、「職業人を対象とした」「職業志向の教育で」「高等教育機関で実施されるもの」を指し、本センターが実施しようとしている教育はこれにあたります。

本学は、「生涯学び続け、主体的に考える力を育成するため、教育環境の全学的かつ継続的な改善を行う」ことを目標の一つとして掲げ、地域社会においてニーズの高い生涯学習、社会人の学びなおしを推進しています。その一つとして、令和２年４月に大学院医歯薬学研究部に本センターが設置されました。本センターは看護職にリカレント教育の機会を提供することにより、地域医療の高度化と看護の質向上を図るとともに、看護学における研究成果を地域社会に還元することを目的としています。今後は看護職のみならず、さまざまな専門職のリカレント教育の拡がりが期待されています。

3）徳島大学がめざす看護リカレント教育とセンターの役割

国立の高等教育機関である本学は、医療系全領域にわたる教育・研究・診療組織が一つのキャンパスに集積している強みがあり、高度な研究活動を基盤とした教育経験が豊富な人材・環境が整備されています。その特色を活かし、医歯薬学研究部保健学域保健科学部門と連携・協働し、まずは、令和３年４月に「特定行為研修を組み込んだ在宅ケア認定看護師教育課程」の開講をめざしています。

「特定行為研修を修了した看護師」は、実践的な理解力、思考力及び判断力と高度かつ専門的な知識と技能を備え、医師の指示の下、手順書により特定行為という診療の補助を行うことができます。また、「認定看護師」は、熟練した看護技術及び知識を用いて、水準の高い看護実践を行います。この度、本研究部が徳島大学病院に続き、県内２つ目の「特定行為研修指定研修機関」として、厚生労働省より指定を受けました。「在宅ケア認定看護師教育課程」開講までには、もう一つ、日本看護協会からの教育機関としての認定を受けなければならず、その結果が待たれるところです。

本学が所在する徳島県や近隣の中四国では、在宅医療提供体制に偏在があり、人材育成が喫緊の課題となっています。「在宅ケア認定看護師」が地域に複数存在することで、地域医療・看護の質向上に寄与できると期待しています。

4）これから専門職業人として活躍される学生の皆さんへ

開講予定の「在宅ケア認定看護師教育」をはじめ、本センターでは今後、臨床の看護職のニーズに基づいた教育プログラムを開講します。第一線の場で活躍する学内外の講師陣による講義を、学部生の皆さんも一緒に受けられる機会を提供します。また、専門性の高い職業人をめざす現場の看護職と交流する機会をもつことも検討しています。ぜひ、学生のうちから医療専門職業人として、「常に学び続けること」や「学び直すこと」、「大学と連携して課題解決にあたること」の認識を醸成してほしいと願っています。

看護リカレント教育センタースタッフ

豊富な教材を活用した魅力ある教育プログラムを検討中

徳島医学会報告

■ 第261回徳島医学会学術集会（令和２年度夏期）

機能解剖学分野　教授　冨田江一
胸部・内分泌・腫瘍外科学分野　教授　丹黒　章

第261回徳島医学会学術集会は、令和２年８月２日（日）に徳島県医師会館を会場に開催された。今回の大学側の担当は、機能解剖学分野　冨田江一教授、胸部・内分泌・腫瘍外科学分野　丹黒章教授が務めた。

今回、新型コロナウイルスCOVID-19感染が拡大する中での開催となった。

With corona時代の先駆けとなるべく、３密となるポスター発表は行わず、講演は、十分な感染対策のうえ、原則無観客で県医師会のネットワークを通じたWeb配信とした。ポスターは、PDF形式でホームページ上に２週間公開し、徳島医学会賞および若手奨励賞の審査を行うこととした。

会場では、教授就任記念講演として地域小児科診療部の早淵康信教授による「肺循環障害と右心不全の病態と治療－小児心臓病のパラダイムシフト－」、徳島大学病院病理部の坂東良美教授による「トリプルネガティブ乳癌の多様性」をご講演いただいた。赤池雅史医学部長、齋藤義郎県医師会長のご挨拶の後、第44回徳島医学会賞及び第23回若手奨励賞授与式が行われ、引き続いて徳島医学会賞受賞記念講演として、徳島大学消化器移植外科の良本俊昭先生による「LED光による新たな癌制御法の開発」、徳島県立海部病院脳神経外科の影児照喜先生の「過疎地域自治体病院において救急医療を支えるハード（ICT）とソフト（マインド）－「医師の働き方改革」と「救急医療体制維持」の両立のために－」をご講演いただいた。続いて、合同シンポジウム「最先端医療を支える解剖学」では、特別講演として、Web会議システムを用いてリモート参加いただいた岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長、人体構成学分野教授の大塚愛二先生に「進化する医学教育」というタイトルで、ヒポクラテスの時代から現代にいたる医学教育史とこれからの展望についてご講演いただいた。基調講演として、同様にリモート参加いただいた四国こどもとおとなの医療センター統括診療部長の東野恒作先生に、クリニカルアナトミーラボ（CAL）立ち上げの経緯についてご講演いただいた。その後、徳島大学病院クリニカルアナトミー教育・研究センターの後東知宏特任准教授から整形外科領域、胸部・内分泌・腫瘍外科の吉田光輝講師から呼吸器外科領域、西野豪志助教から食道外科領域のCALを用いた手術手技開発の報告が行われた。冨田教授からはCTを併用した新しい系統解剖実習の紹介があり、最後に、丹黒教授から先進医療を支える解剖学の発展と学生のモチベーション維持の重要性が強調された。参加者全員、崇高なご献体を介して医療を支えてくださる白菊会会員へ感謝の念を抱きながら会を終えた。本学術集会の開催にあたり、徳島県医師会、徳島医学会事務局、関係スタッフの皆様およびご参加・ご協力いただいた関係の皆様に、心より感謝申し上げます。

（文責：胸部・内分泌・腫瘍外科　助教　西野豪志）

◆◆◆　各賞受賞者　◆◆◆

■第261回徳島医学会学術集会（令和2年8月2日）において、第45回徳島医学会賞及び第24回若手奨励賞の受賞者が選考されました。

第45回徳島医学会賞

原　加奈子（徳島大学大学院医歯薬学研究部代謝栄養学分野）
「重症患者における筋萎縮と尿中タイチン濃度に関する検討」

佐藤　隆久（徳島西医師会）
「糖尿病無料検診20回の検討（2012年～2020年）」

第24回若手奨励賞

今川　祥子（徳島県立中央病院医学教育センター）
「当院での急性冠症候群患者における脂質コントロールの現況」

川原　綾香（徳島大学病院卒後臨床研修センター）
「歩行不能だったが、多職種の密な連携と患者特性に配慮したケアにより自宅生活可能となった高度肥満症の一例」

学遊抄

精神医学分野 教授 大 森 哲 郎

学生時代の友人や精神科の仲間など大切な交流は数多いが、留学中の付き合いは特別の意味があった。米国オハイオ州ケースウエスタンリザーブ大学の Herbert Meltzer 教授の研究室で精神薬理学の実験研究に従事したのは、1985年８月から87年10月までのことだった。同教授にはすでに実力者の風格が漂っていたが、振り返ってみると当時はまだ40代後半の気鋭の学者だった。研究室は数名の基礎研究者と専属の統計学者を擁し、２名の秘書と数名の実験助手がいた。そこに臨床研究を推進する精神科医が数名出入りしていて、いつも活気に満ちていた。教授の精力的な仕事ぶりには感嘆したし、若手研究者の狙いを絞った研究スタイルにも感心した。

彼の地の精神科臨床には興味があったので、精神科他部門の抄読会や症例検討会などにも時間を作って参加した。抄読会では参加者の活発な議論をフォローするのに語学的にも内容的にも四苦八苦し、検討会では指導教授をファーストネームで呼んで気楽に議論する同世代の医師達の屈託のなさに目を見張った。少しだけ患者を診る機会もあり、文化は異なっても精神疾患は国境を越えて同じであると実感した。そのうち誘われて精神科ソフトボールチームにも参加したりしたのだった。

これらの経験と交流は、当時思っていた以上に帰国後の活動に影響があった。

精神科ソフトボールチームの仲間と（1987 年）

会長を務めた学会に Meltzer 教授をご招待（2009 年）

学遊抄 「邂逅と創造そして後生可畏」

胸部・内分泌・腫瘍外科学分野 教授 丹 黒 章

1981年徳島大学医学部を卒業した。在学中の私の住所は蔵本町3－18－15、青藍会館が建つ場所にかつての「学生寮」があった。１ヶ月の寮費は２食付きで9,100円だった。隣接する運動場南には教授官舎があり、住人の勝沼信彦教授にはよく飲ませていただいた。卒業後は郷里の山口大学第二外科（現消化器腫瘍外科）に入局し、３人の教授に師事した。石上浩一教授には食道外科の手ほどきを受け、鈴木敞教授には膵臓外科を学んだ。米国アーカンソー大学に留学する機会を得て CCK のラジオイムノアッセイで有名な Rayford 教授のもとで２年間の研究生活を送ることができた。多くの友人ができ、想像をはるかに超えた充実した時間を過ごせた。岡正朗教授（現山口大学学長）の下で助教授を勤めていた2004年12月に徳島大学病態制御外科（第二外科）の教授を拝命し、23年ぶりの母校に赴任した。その第二外科は1954年11月、高橋喜久夫教授により開講された。東京でオリンピックが開催された1964年の翌年10月に第18回日本胸部外科学会を主宰されるも直前に急逝された。その会期中に日本食道学会の前身である第1回食道疾患研究会が眉山ホテルで誕生した。コロナ禍で56年ぶりの東京オリンピックは延期になったが、12月、55周年となる74回日本食道学会をその生誕の地徳島で主催する。「邂逅と創造」がテーマである。人や物との出会いが新たな発明を生む。無尽蔵の可能性を持つ後生である学生諸君に「後生可畏」の言を送る。

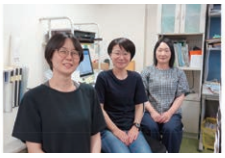
University of Arkansas for Medical Sciences,
Department of Physiology
前列右端が 35 歳の私です。

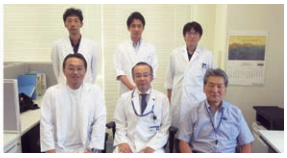
寄附講座「実践地域診療・医科学分野」紹介

特任教授　粟飯原 賢一、特任教授　添木 武、特任准教授　湯浅 智之、特任准教授　乙田 敏城、
特任講師　中村 信元、特任講師　谷口 達哉、特任助教　青山 万理子、
技術補佐員　上元 良子、関根 明子

この度、JA 徳島厚生連の寄附により、令和２年４月１日をもって、実践地域診療・医科学分野が開設されました。本寄附講座は、本年３月まで JA 徳島厚生連阿南医療センターにおいて活動していた寄附講座「糖尿病・代謝疾患治療医学分野」を基盤母体として、発展改組の形をとって設立されました。教員スタッフは前講座より引き続き、糖尿病・内分泌代謝領域を特任教授の粟飯原、特任准教授の湯浅、同乙田が担当し、新たに設けられた循環器不整脈領域を特任教授の添木、血液内科領域を特任講師の中村、消化器内科領域を特任講師の谷口、胸部内分泌腫瘍外科領域を特任助教の青山が担当しています。また、前講座より引き続き、技術補佐員の上元、関根が、講座運営と研究支援のサポート体制をとっています。

前身講座では糖尿病・内分泌代謝疾患領域に注力し、診療・教育･研究活動を行なっていましたが､南部医療圏での診療ニーズは非常に多方面かつ高度化しており、単一診療科だけでは生活習慣病や慢性疾患の予防および重症化の阻止、そして健康寿命の延長をめざした研究と診療を行うことが困難となってきました。





そこで、今春開設された新しい寄附講座では、従来より幅広い診療領域で、阿南医療センターでの外来診療や常勤医師と連携した病棟診療支援業務を行うことにしています。また、阿南医療センター内に開設された阿南地域医療教育センターを拠点として、現在はコロナウイルス感染症の影響のため、休止状態ではありますが､徳島大学の臨床実習医学生、研修医および専攻医の効果的なトレーニングを実施する事を目指しています。この様な活動を通して、将来の地域医療を担う若手医師の育成を推進するとともに、地域住民の健康増進や生活習慣病の発症および合併症予防につながる臨床研究も精力的に行なっていく所存です。

寄附講座「地域呼吸器・一般外科学分野」紹介

特任教授　丹黒　　章（併任）、特任助教　松本　大資

この度、高知県厚生農業協同組合連合会の寄附により、令和元年６月１日付けで地域呼吸器・一般外科学分野が新設されました。丹黒が特任教授を併任し、松本大資が特任助教を拝命いたしました。本分野は JA 高知病院への診療支援を通して、医療人材の不足している高知県南国市医療圏における呼吸器外科を含む胸部外科ならびに一般外科に関する専門的診療能力を有する医師を地域で育成することを目的として設置されました。直接診療・教育にあたる当初のスタッフは１名ですが、すでに設置されている地域呼吸器・総合内科学分野とともに JA 高知病院における診療支援を通して地域医療に貢献していきたいと思います。JA 高知病院は本学出身で教室同門の谷木利勝名誉院長ならびに、同じく同門の都築英雄病院長の牽引力により、各診療科の連携が進み、地域包括ケア病棟を有した介護老人保健施設「JA いなほ」の利点を生かしながら、急性期から慢性期までの各疾患の患者ケアを実践しており、経営も安定しております。母教室である胸部・内分泌・腫瘍外科と連携して外科の外来・入院診療と手術の支援を積極的に行っていく予定です。JA 厚生連施設は国立病院機構などと同様、全国展開されている準公的医療機関であり、徳島県においても同様に､吉野川医療センター､阿南医療センターにおいて徳島大学の連携教育病院として、近未来型の地域医療を実践、研修できる場を提供しています。JA 厚生連が運営している保健・健康増進、高齢者福祉事業とも連携して、地域呼吸器・総合内科学分野とともに呼吸器疾患の病態解明と治療法の開発、予防、疫学研究も推進したいと考えています。

ＪＡ高知病院外観

手術室風景

数字で見る医学部

◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

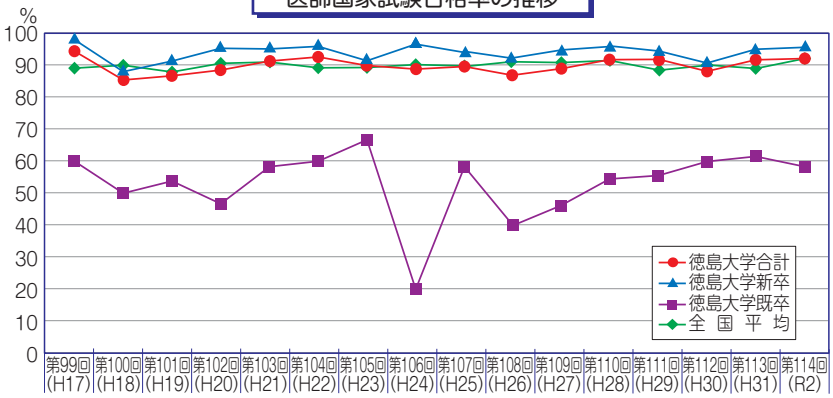
令和２年度　徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数・入学者数調

		定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	その他	現役	一浪	その他
医学科		114	258	200	※118	114	71	43	39	75	0	57	40	17
医科栄養学科		50	145	91	54	52	4	48	11	41	0	47	5	0
保健学科	看護	70	284	163	76	72	1	71	40	32	0	62	7	3
	放射	37	233	164	42	37	23	14	5	32	0	32	3	2
	検査	17	70	62	20	18	6	12	8	10	0	15	3	0

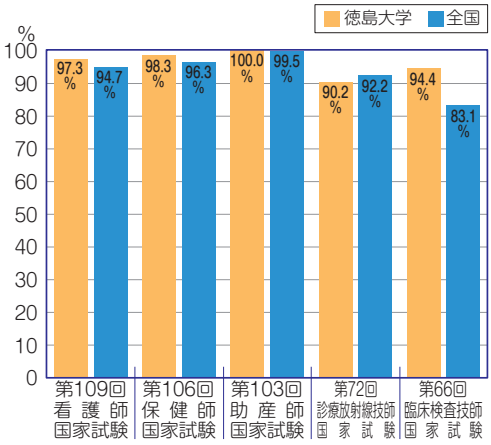
※入学辞退者4名があったため追加合格者4名を出したことにより、合格者が118名となった。

◆ 国家試験

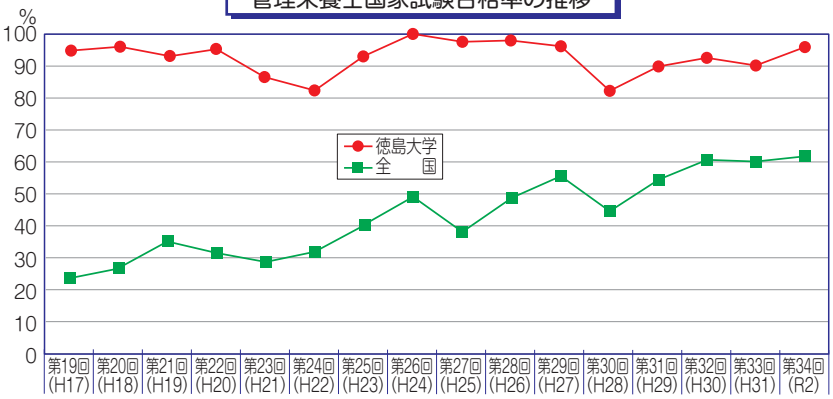
医師国家試験合格率の推移



保健学科　各種国家試験合格状況について



管理栄養士国家試験合格率の推移



◆ 科研費採択状況（医学部・病院の合計）

（令和２年７月１日現在）

研究種目名	平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度		令和２年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
基盤研究（A）	1	11,700	1	11,700	1	5,500	1	10,400	1	9,100	1	4,600
基盤研究（B）	16	65,000	19	68,700	13	41,600	12	49,200	13	64,900	13	50,600
基盤研究（C）	97	120,400	103	125,600	106	117,000	35	46,200	99	106,700	104	183,100
挑戦的萌芽研究	17	22,600	21	25,500	10	11,800	0	0	0	0		
挑戦的研究（開拓）					0	0	0	0	0	0	未定	未定
挑戦的研究（萌芽）					2	4,800	2	3,600	2	4,800	4(※)	6,400(※)
若手研究（A）	3	14,700	4	31,600	4	16,300	4	17,300	2	7,000		
若手研究（B）	53	74,400	57	73,800	50	68,500	27	38,600	7	4,100	1	0
若手研究									56	77,800	68	130,400
研究活動スタート支援	8	8,600	6	6,800	2	2,100	3	3,400	1	1,430	5(※)	5,500(※)
新学術領域研究	1	10,900	2	14,900	3	25,800	4	46,000	2	22,200	0	0
特別研究促進費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	2	1,700	4	3,400	3	2,500	6	4,800	5	4,300	4	3,900
国際共同研究強化	2	22,400	1	11,200	0	0	1	1,900	1	4,000	1	4,000
合計	200	352,400	218	373,200	193	294,800	95	221,400	189	306,330	192	376,700

※国際共同研究強化については、平成27年度からの新規種目。
※挑戦的研究（開拓）及び挑戦的研究（萌芽）については、平成29年度からの新規種目。
※若手研究（A）を基盤研究に統合し、若手研究（A）の公募を停止。それに伴い、若手研究（B）の名称を「若手研究」と改名。
※令和２年度科研費は、新型コロナウイルス感染症の影響により一部の研究種目において交付内定時期等が遅れているため、７月１日現在で把握している情報を掲載。（※印は継続分のみ）

令和２年度　臨床実習後OSCE成績優秀者

令和２年７月４日、診療参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）の最終評価として、６年生を対象とした診療参加型臨床実習後 OSCE を実施しました。赤池医学部長より Web を通じてのフィードバックと成績優秀者の発表があり、成績優秀者については、後日、表彰状と青藍会からの副賞の授与を行う予定です。今年の６年生は新型コロナウイルス感染症の影響により、臨床実習を診療現場で行うことができず、課題学習および遠隔指導となりましたが、このような状況に怯むことなく、今後も優れた医師となることを目指して、努力を続けて欲しいと思います。

最優秀賞　宮　口　昂　樹

優 秀 賞

別所　達生、窪田　　沢、篠原　健太、
草壁　　優、西原　　諒、山中　佐織、
加地　泰征、武本奈緒子、小島　有紗

医学部長特別表彰

令和２年６月19日、医学部長特別表彰表彰状授与式を執り行いました。新型コロナウイルス感染症への対応に際し、遠隔授業実施体制の確立ならびその実施サポートに尽力した功績に感謝し、医学科遠隔授業サポートチームメンバーに、赤池医学部長より表彰状が授与されました。赤池医学部長からは、これからも人のために尽くす心意気を持ち続けてほしいとの激励のお言葉がありました。

【医学科４年】
阿部　祐也、大崎　華奈、宮田　晃志、
山本　秀樹

【医学科３年】
遠藤亜衣子、近藤　真央、滝本　子々

【医学科２年】
竹原　　優、福田　翔一、LI MEISA

【医学科１年】
小野川　希、澤田　晴奈、山根　綾華

【医科学教育部博士課程１年】
土山　洋介

病態生理学分野　　准教授　西田　憲生
疾患病理学分野　　助　教　清水真祐子
微生物病原学分野　助　教　駒　　貴明
技術支援部 蔵本技術部門
技術専門職員　山田　佳子
技術支援部 蔵本技術部門
技術員　吉田　和子

新任教職員ご挨拶

薬理学分野　教授　池　田　康　将

令和２年８月１日付けで薬理学分野の教授を拝命いたしました。私は平成９年に本学を卒業後、第一内科（現 血液・内分泌代謝内科学）に入局し、関連病院で内科学を研鑽しました。大学院入学後に開始した基礎研究に魅了され、米国ボストン大学への留学の後、平成21年に基礎医学教室である薬理学分野に移動しました。現在取り組んでいる微量金属栄養素を標的とした研究に加えて、今後も魅力ある研究を継続し、また、医学知識の体系的理解につながる薬理学教育ならびに次世代を担う研究者育成にも尽力いたす所存です。

教室を盛り上げるべく研究・教育に精進して、医学部に貢献していく所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

救急集中治療医学分野　教授　大　藤　　純

令和２年８月１日付けで、救急集中治療医学分野の教授を拝命いたしました。平成９年に徳島大学を卒業後、麻酔科および救急科にて研鑽を積み、平成14年より徳島大学救急集中治療科にて、重症呼吸不全管理や困難気道に関する研究を行って参りました。また、平成28年より ER・災害医療診療部部長を拝命し、徳島県下の救急災害医療にも従事して参りました。微力ではありますが、徳島県の急性期医療の発展のため、臨床・教育・研究に全力で取り組む所存ですので、今後ともお力添えを頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

産科婦人科学分野　教授　岩　佐　　武

令和２年８月１日付けで大学院医歯薬学研究部産科婦人科学分野教授を拝命いたしました。

私は平成14年に徳島大学を卒業すると同時に徳島大学産科婦人科学教室に入局し、徳島大学病院および関連施設にて臨床研鑽を積んでまいりました。生殖医療を専門としており、主に一般的な不妊治療から生殖補助医療（体外受精・顕微授精）に至るまでの診療を担当しております。また、大学院時代から現在に至るまで生殖内分泌に関する研究を継続しており、最近では後輩たちに研究の魅力を伝えるべく日々努力しているところです。

微力ではありますが、徳島大学の今後の発展に力を尽くしてまいる所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

応用栄養学分野　教授　瀬　川　博　子

令和２年５月１日付けで大学院医歯薬学研究部応用栄養学分野教授を拝命いたしました。

私は和歌山市の出身で、平成７年に徳島大学医学部栄養学科を卒業、大学院栄養学研究科博士課程（前期および後期課程）に進学しました。平成12年博士後期課程を修了後、本学栄養科栄養化学教室（現応用栄養学分野）に助手として採用され、助教、講師を経て現在に至ります。途中共に２年間の国内留学（東京）や海外留学（米国・ボストン）以外は、徳島大学に在籍し、教育、研究に従事いたしました。これまで、栄養素トランスポーターの分子同定、機能解析、生理学的役割および病態との関係を明らかにし、主に栄養学的側面から疾患治療に貢献するための基礎研究を行ってきました。今後、これまでの研究を発展させると共に新たな挑戦も行い、研究・教育活動を推進し、次代の栄養学を担う管理栄養士・栄養学研究者の育成に貢献したいと考えております。今後ともご指導・ご鞭撻賜りますようよろしくお願い申し上げます。

地域運動器・スポーツ医学分野　特任教授　酒　井　紀　典

2020年４月１日付で、寄附講座「地域運動器・スポーツ医学分野」の特任教授を拝命しました酒井紀典です。本講座はこれまで、吉野川医療センターより御寄付いただき、徳島県西部を中心とした運動器疾患に対応し、診療の充実を図ると共に、教育・研究の推進および人材育成に取り組んできました。さらに2019年から阿南医療センターにも参画いただき、県南部にもこの取り組みを広げはじめています。

徳島県全域にわたる子供から高齢者に至るまで、専門性の高い運動器（整形外科）疾患の診療・スポーツ医学を充実させることのほか、地域で活躍する人材の育成・確保に取り組むことが、私の大きな使命であると考えています。将来的には、地域の運動器疾患の減少・予防にも目を向けた社会活動も行っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

実践地域診療・医科学分野　特任教授　粟飯原　賢　一

令和２年４月１日に実践地域診療・医科学分野の特任教授を拝命致しました。私は、平成３年に徳島大学医学部医学科を卒業し、同年旧第１内科に入局しました。以後関連病院で内科研修を行い、平成10年から３年間、東京大学分子細胞生物学研究所にて研究活動に従事しました。本学復帰後は、旧生体情報内科学および血液・内分泌代謝内科学スタッフ、文部科学省研究振興局学術調査官を歴任後、平成27年11月から前職の糖尿病・代謝疾患治療医学分野特任教授として、阿南エリアを中心に地域医療支援に従事して来ました。新寄附講座では、診療領域とスタッフが拡充されることになり、学内外を問わず、より多くの先生方や医療関係者の方々のご支援が必要な状況となっております。本学と地域医療に貢献するためこれからも尽力する所存ですので、引き続きご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

実践地域診療・医科学分野　特任教授　添　木　　武

令和２年４月１日付けで実践地域診療・医科学分野の特任教授を拝命いたしました。私は平成４年に本学を卒業後、旧第二内科に入局し、国立善通寺病院、国立循環器病センターなどで循環器並びに内科全般の診療・研究に携わり、平成17年から本学に復帰しました。本学では循環器内科学で不整脈を中心とした診療、研究、教育に従事し、准教授、総務医長として循環器内科学佐田政隆教授のサポートを行ってきました。今後は、引き続き徳島大学循環器内科学分野と連携し、本学における循環器・不整脈分野での診療・研究のさらなる発展に貢献することが出来ればと考えています。そして、（本寄附講座の設置元である）阿南医療センターにおいて、地域のニーズにあった循環器診療を実践し、今後の地域医療を担う内科医の育成に尽力できたらと思っています。特に、カテーテルアブレーション、ペースメーカー植込術などの不整脈関連手術を推進し、診療レベルの底上げに少しでも貢献出来ればと考えています。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

大学院医歯薬学研究部看護リカレント教育センター　特任教授　山　下　留理子

令和２年４月１日付で看護リカレント教育センター特任教授を拝命いたしました。私は徳島県出身で徳島市役所において公衆衛生行政に従事し、本学から看護教育をスタートいたしました。公衆衛生看護・在宅看護を専門とし、多様性のある暮らしの場における「生活を支える看護」について、教育・研究・地域貢献に従事してまいりました。全国に比して高齢化が進む徳島県に10年ぶりに戻り、在宅ケアの場に直面する喫緊の課題とともに、地域独自の強みや潜在する可能性にも気づかされています。私に与えられた任務は、社会に開かれた高等教育機関として、臨床の看護職の生涯学習システムを構築することです。医学部学生や大学院生、教職員の皆さんとともに連携・協働しながら、高い看護実践力と専門性を追求できる看護職を養成し、強みのひとつとなって地域医療や看護の質向上につながるよう尽力してまいりたいと思います。ご指導・ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

蔵本事務部長　木　虎　　章

令和２年４月１日付けで蔵本事務部長を拝命いたしました木虎章（きとらあきら）と申します。今年は、年始めから新型コロナウイルスの世界的感染拡大の兆しが現れ、日本でも全国の学校が休校となり、入学式の中止、外出自粛、また遂には東京オリンピックの延期など、これほど世界が変わってしまうなんて一体誰が想像できたでしょうか。「禍を転じて福となす」ということわざがありますが、このコロナ禍もいつか転じて福となり、2020年はリモートワークなど新しい働き方の先駆けとして歴史に残るのかもしれません。蔵本事務部もこの禍を契機に過去の経験に囚われず、常に新しい変化に対応して学生や教職員の皆様に迅速かつ適切なご支援できるようにしたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

新任准教授紹介

異動年月日	異動内容	氏名	所属
R２.４.１	昇任	若　槻　哲　三	循環器内科学分野
R２.４.１	採用	浜　田　大　輔	運動機能外科学分野
R２.４.１	昇任	北　村　嘉　章	耳鼻咽喉科学分野
R２.４.１	昇任	安　藝　健　作	細胞・免疫解析学分野
R２.４.１	採用	乙　田　敏　城	実践地域診療・医科学分野
R２.６.１	採用	森　垣　龍　馬	先端脳機能研究開発分野

医学部行事予定（令和２年10月～令和３年３月）

令和２年
10月１日㈭　後期授業開始
10月21日㈬　遺骨返還式
11月２日㈪　第115回医師国家試験願書受付（11月30日㈪まで）
　試験日：２月６日㈯～２月７日㈰
11月２日㈪　徳島大学開学記念日
11月13日㈮　第104回助産師国家試験願書受付（12月４日㈮まで）
　試験日：２月11日㈭
　第107回保健師国家試験願書受付（12月４日㈮まで）
　試験日：２月12日㈮
　第110回看護師国家試験願書受付（12月４日㈮まで）
　試験日：２月14日㈰
11月24日㈫　第35回管理栄養士国家試験願書受付（12月７日㈪まで）
　試験日：２月28日㈰
11月26日㈭～27日㈮　入学試験（学校推薦型選抜Ⅰ）
11月28日㈯　入学試験（総合型選抜）
12月14日㈪　第73回診療放射線技師国家試験願書受付（１月４日㈪まで）
　試験日：２月18日㈭
　第67回臨床検査技師国家試験願書受付（１月４日㈪まで）
　試験日：２月17日㈬
12月25日㈮～１月７日㈭　冬季休業

令和３年
１月16日㈯～17日㈰　大学入学共通テスト（第１日程）
１月30日㈯～31日㈰　大学入学共通テスト（第２日程）
２月13日㈯～14日㈰　大学入学共通テスト（特例追試験）
２月13日㈯　入学試験（学校推薦型選抜Ⅱ）
２月25日㈭～26日㈮　一般選抜（前期日程）
３月12日㈮　一般選抜（後期日程）
３月16日㈫　医師国家試験合格発表
３月23日㈫　卒業式･大学院修了式
３月23日㈫　診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験合格発表
３月25日㈭～31日㈬　学年末休業
３月26日㈮　助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
３月26日㈮　管理栄養士国家試験合格発表

徳島大学は、学校教育法第109条第２項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準を満たしている」と認定されました。
（平成26年３月26日）

●認証評価機関
独立行政法人大学改革支援･学位授与機構
●認証期間　７年間
（平成26年４月１日～平成33年３月31日）

編集後記

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行に伴う日常生活での行動制限や経済停滞のなか、医療現場ではCOVID-19対応と通常診療を両立するために、医療従事者及び医療機関の負担が増しています。本学でも３密回避、不要不急の外出自粛や課外活動の制限など、多くの感染対策が学生にも課せられており、学生実習、特に臨床実習においてはかなりの制限が生じています。しかし、対面講義に関してはオンライン形式への移行が比較的スムーズに進み、昨年度からのBYOD取組みと相乗してうまく対応できている印象を受けます。遠隔講義に対する学生アンケートでは2/3以上が対面に比べ学習効果が優れていると回答し、肯定的な意見が多くみられました。一方で、COVID-19に対する種々の政策が報道される度に、以前から指摘されていた行政や公的機関におけるIT化の遅れが露呈しています。DXが速やかに進展することを大いに期待しながら、コロナ禍の早期終息を祈念しています。（医学部広報委員会　委員長　廣瀬　隼）

発　　行　徳島大学医学部　　編　　集　医学部広報委員会
広報委員　廣瀬　隼（委員長）、野間口雅子、勢井宏義、橋本一郎、濵田康弘、友竹正人、木虎　章

本誌へのご意見･ご要望は、(総務係)E-mail：isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp までお願いします。
なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。
Tel：088-633-9116　Fax：088-633-9028　URL https://www.tokushima-u.ac.jp/med/